1970.7.16 明治大学新聞

ついに第三の中執誕生

学苑会継続大会

ノンセクトが主導権

15日、ML派は出席せず

学苑会定例学生大会の継続大会は七月十五日午後七時から本校六号館六四一番教室で開催された。この大会は去る六月十二日に流会になって以来、打ち切られたままになっていたもので、反帝学評、ノンセクトを中心とする中執委員が大会を告示し、開催のはこびとなった。なお、これまで学苑会の主導権を握っていたML派はこれに参加せず、この大会を認めない方針。さらに、民青系の学苑会中執も依然として存在しており、学苑会は三つに分裂した格好になった。六・一二襲撃事件以来、ML派がまったく本校地区に姿を見せないため、今のところこの大会をめぐっての直接的な衝突は起こっていないが、今後、内ゲバという事態が生じる可能性も十分に考えられている。

大会は青ヘルの一団がものものしく入口を固める中、開催予定の五時半より一時間半遅れて、七時から始まった。七時現在の出席代議員数は法学部一三名、商学部六名、政経学部一四名、文学部一八名研連一二名、寮三名、政経学部と文学部の中執委員六名の総数七二名。これを見守るオブザーバーは約二〇〇名。

まず、議長に桜田健君（文四）小林功二君（政一）、堀沢紀行君（政三）の三名が選出され、議事に入った。

最初に、中執委員の方から大会流会以降これまでの、経過報告が行なわれた。その後、議案書、対案書の審議に入った。そして、さきに現中執（ML派）から提出されていた議案書を、代議員六五名の否決決議で拒否。

続いて、勝部良二君を責任者とする対案書（勝部案）と四日市生君を責任者とする対案書（小島案）が出され、それぞれ趣旨説明が行なわれた。

小島案は、政治研究部、文学研究部代議員、政経二ノ七、政経三ノ八、政経二ノ一、商二ノ七などが中心となったものでその主旨は「学苑会を全共闘運動を推進していくうえでの一手段とし、全共闘再編のために学苑会の性格を変化させてゆかねばならない」というもので、総括においては、昨年十一月までの闘争を、「党派の矮小化された全共闘の領導であり、全共闘の強固な結合、各闘争委の自立した個別課題の追求は成し得なかった」としている。

また、勝部案は、七〇年代を「プロレタリアートとブルジョアジーのしのぎを削る階級戦への突入の時代」としており、「教育の帝国主義的再編を粉砕し、教育研究を労働者人民の手に奪還せよ」と結んでいる。また「労学連帯の下に、工場・学園からの総反乱を」とも呼びかけており、反帝学評のセクト色濃いものであった。

九時一〇分。大学当局はこの集会を不許可集会であるとして、中止警告を流したが、大会はそのまま続行された。

しかし、一〇時一〇分。議長から、校舎のまわりに六台の装甲車で、機動隊が出動してきているとの報告がなされ、早急に採決を行なうとの発表があった。そのため、中執委員の財政報告の後、すぐに採決のための議場閉鎖が行なわれ、対案・人事案が一括採決された。その結果、勝部案支持二八名、小島案支持三三名、保留一三名、棄権一名となり、小島保雄君（政経三）を委員長とする新執行部が選出された。

インター斉唱、スローガンのシュプレヒコールのあと、会場から出た約一〇〇人はお茶の水駅前までデモ行進。駅前広場で各闘争委ごとの総括集会を開いて、一一時ごろ、解散した。

なお新執行部は十八日付で中川学長宛に承認要請の報告書を提出したが、大学側はこれを認めない方針。

新中央執行委員は次の通り。

委員長　小島保雄（政経三）
副同　池田　真（文三）
副同　小林功二（政一）
書記局長　水田　修（文三）
副同　兼任
財政部長　松岡幹夫（法四）
副同　安藤哲広（政一）
情宣部長　[illegible]（政四）
副同　兼任
組織部長　[illegible]彰（政三）
副同　兼任
渉外部長　伊藤[illegible]海（法三）
副同　兼任
厚生部長　池田　真（文三）
副同　小林功二（政一）
会計監査　早川要江（文一）
渡辺浩二（政一）
高見俊治（法二）
宮本秀春（商三）

小島保雄新委員長談　委員長になることよりも、何よりノンセクトの意見を学苑会で述べたかった。MLのテロ事件以来、大衆が党派を醜いと見るむきがあり、それが結果的にわれわれを支持したのではないか。党派がくみ尽しきれなかったノンセクトのエネルギーを必ず吸収する。単なるアンチセクトにはならない。当面ノンセクトの一致点としての反権力の方針で闘う